10
士師
聖徒伝 76

「王なき時代の希望の光」

士師記19～21章　偶像を巡る争い

Shikaoichurch.com

【今日のアウトライン】

０．　イントロダクション

Ⅰ．　ギブアの民の暴虐　19章

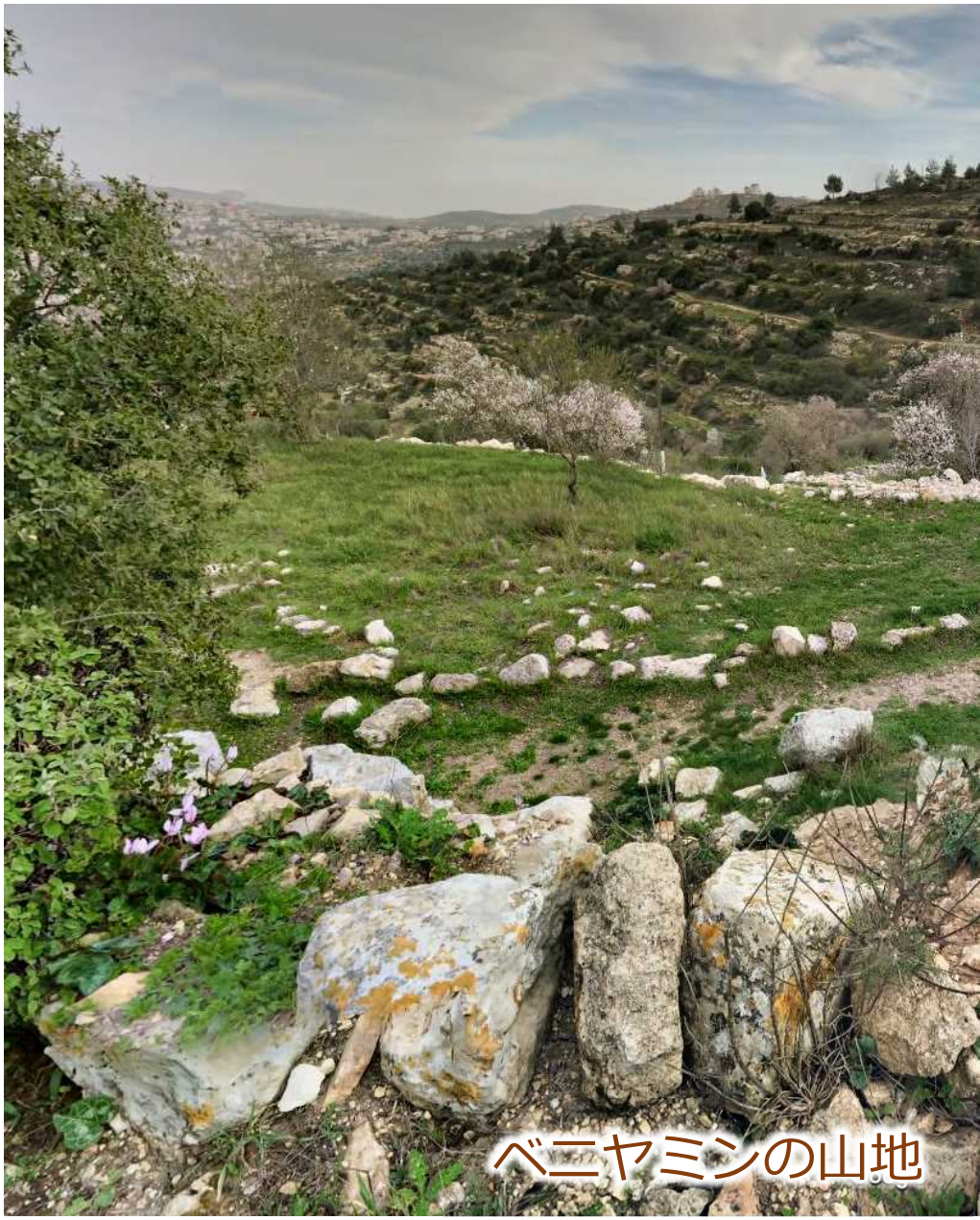
Ⅱ．　ベニヤミンとの戦い　20章

Ⅲ．　神への背きの末路　21章

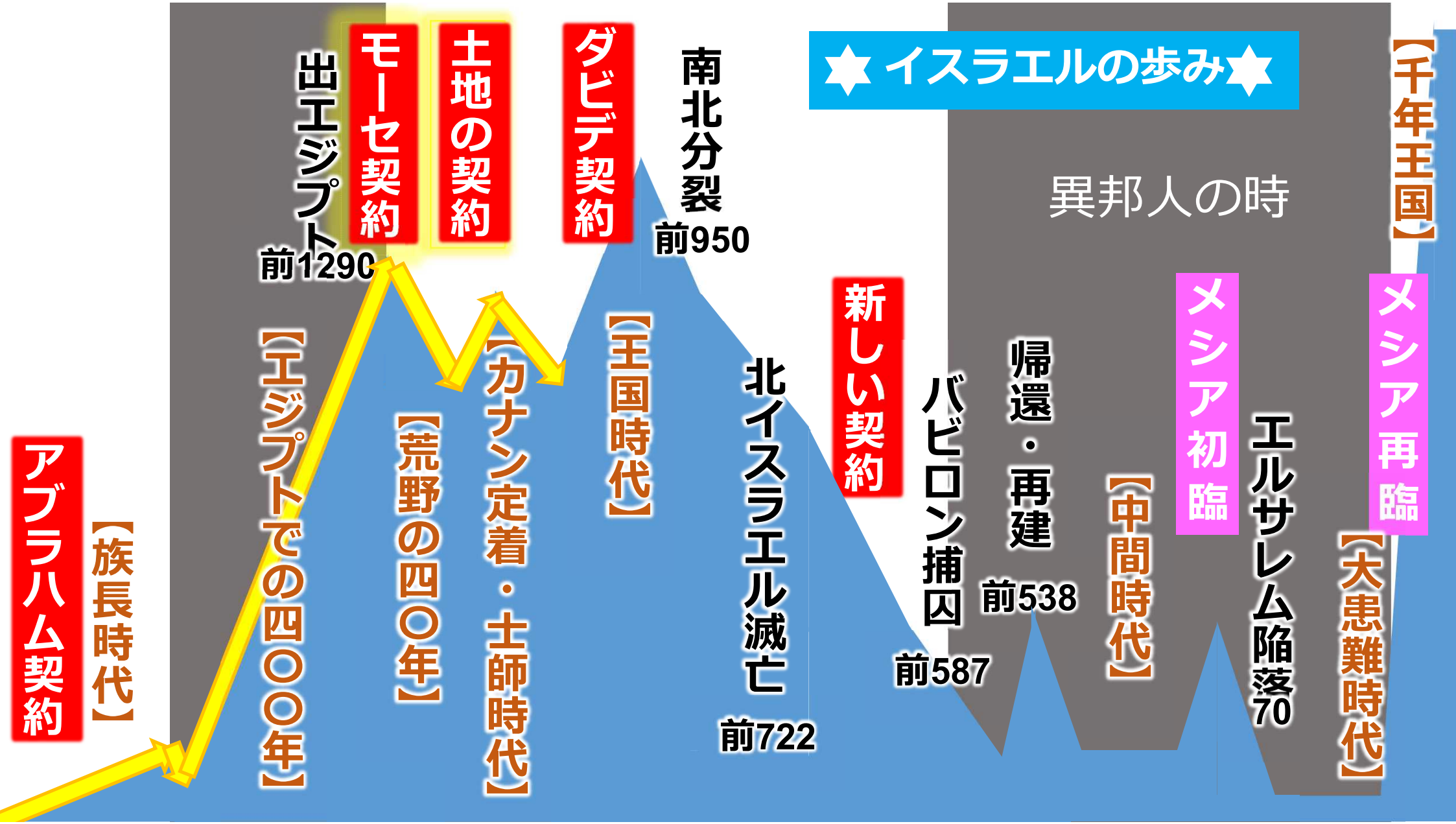
Ⅳ．　まとめと適用

打ち砕かれて

主の愛を知ろう



【無垢の時代】
天地創造
【良心の時代】
堕罪
~大洪水
【人類統治の時代】
バベルの塔事件
【約束の時代】
アブラハム
～ヤコブ
【律法の時代】
イスラエル王国時代
メシア初臨
【恵みの時代】
聖霊降臨
世界宣教
メシア再臨
【御国の時代】
千年王国
大審判
新天新地
①エデン契約
②アダム契約
③ノア契約
④アブラハム契約
⑤モーセ契約
⑥土地の契約
⑦ダビデ契約
⑧新しい契約
神の約束が、人類と世界の歴史を導く!!
過　去
現　在
未　来


イスラエルの歩み
アブラハム契約
【族長時代】
【エジプトでの四〇〇年】
出エジプト
前1290
モーセ契約
【荒野の四〇年】
土地の契約
【カナン定着・士師時代】
ダビデ契約
【王国時代】
南北分裂
前950
北イスラエル滅亡
前722
新しい契約
バビロン捕囚
前587
帰還・再建
前538
【中間時代】
異邦人の時
メシア初臨
エルサレム陥落
70
【大患難時代】
メシア再臨
【千年王国】

【士師の時代・残された土地】

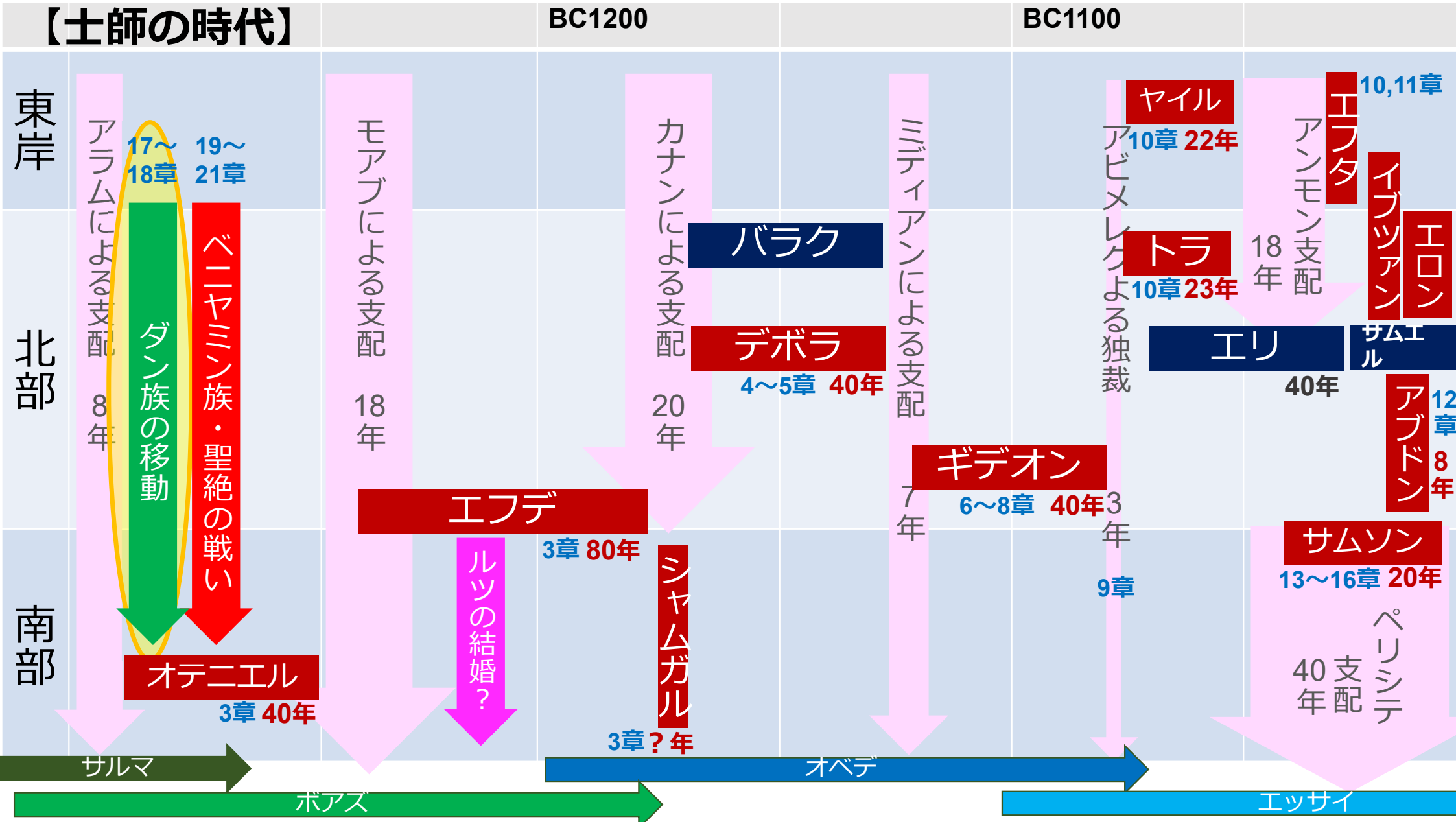
■ヨシュアに率いられたイスラエルは、１２部族
それぞれの相続地を手に入れた。

■しかし、未征服の地がまだ多く残っていた。

■カナン人の町が要所にあり、周囲にも、強力な
民族がいて、イスラエルを脅かしていた。

■イスラエルが背教し、異民族に苦しめられ、
悔い改めて主に助けを求めると、
主は、士師を立て、敵を撃退された。

■士師は、あくまで一部族のリーダー。
全イスラエルを治める王は、まだいなかった


【土師の時代】
BC1200
BC1100
東岸
北部
南部
アラムによる支配 8年
17～18章
19～21章
ダン族の移動
ベニヤミン族・聖絶の戦い
オテニエル
3章 40年
モアブによる支配 18年
エフデ
3章 80年
ルツの結婚？
カナンによる支配 20年
バラク
デボラ
4～5章 40年
シャムガル
3章？年
ミディアンによる支配 7年
ギデオン
6～8章 40年
アビメレクよる独裁 3年
9章
ヤイル
10章 22年
トラ
10章 23年
アンモン支配 18年
エフタ
10,11章
イブツアン
エロン
エリ
40年
サムエル
アブドン
12章 8年
サムソン
13～16章 20年
ペリシテ支配 40年
サルマ
ボアズ
オベデ
エッサイ

【特異な士師記17~21章】

■時代は、**士師記の初期**。ヨシュアの死後。
　…祭司ピネハスの時代(士師20:28)

■書かれたのは、サウル王以降？
さらに言うと**北王国滅亡後**？
　…ダン族の捕囚について言及(士師18:30)

■著者(or編集者)は？
　➡南王国の預言者が記した厳しい教訓？

■律法の記述は、ほぼ皆無の士師記だが、
読者は律法を理解していることが前提。

Ⅰ．ギブアの民の暴虐　　士師記19章

【王なき時代の不可解】士師19:1

イスラエルに**王がいなかった時代**のこと、一人のレビ人が、エフライムの山地の奥に寄留していた。この人は、側女として、ユダのベツレヘムから一人の女を迎えた。

■ここに記されるのは、**王なき士師の時代**の最初に起こった、最悪の出来事。

■17~18章と共通する要素。

❶寄留するレビ人　…民の不信仰を象徴するもの。

❷エフライムの山地　…幕屋が置かれた中心地。

❸ベツレヘム　…やがてダビデを輩出する町。

■前章のミカのような行為が横行していた？

【不穏な滞在】 士師19:2～10

- ベツレヘム(丸1日の距離？)の実家に帰った側女を、レビ人は連れ戻しに行った。が、舅に引き留められるまま、ずるずると6日も滞在した。
- なすべきことを即行わないのは、不信仰。

19:10 その人は泊まりたくなかった*ので、立ち上がって出発し、エブスすなわちエルサレムの向かい側までやって来た。鞍をつけた一くびきのろばと、側女が一緒であった。

＊まさか、安息日の出来事か!!

【ベニヤミン族の町ギブア】士師19:11～21

■出発が遅すぎたため、日はすぐに傾いた。
エブス人の町(**エルサレム!!**)に泊まることを
僕に進言されたレビ人は、それを拒絶した。

■選んだのはベニヤミン族の町ギブア。
しかし、泊めてくれる者はおらず。寄留する
エフライム族の老人の世話になることに。

■足りない者はないから、というレビ人に、
「広場で夜を過ごすな」と老人は行った。

※すでに既視感がある光景。(創世記19章)

【深い闇の中での暴虐】士師19:22～24

彼らが楽しんでいると、なんと、町の男たちで、よこしまな者たちが、その家を取り囲んで戸をたたき続け、家の主人である老人に言った。「おまえの家に来たあの男を引き出せ。あの男を知りたい。」

そこで、家の主人であるその人は、彼らのところに出て行って言った。「それはいけない、兄弟たちよ。どうか悪いことはしないでくれ。あの人が私の家に入った後で、そんな恥ずべきことはしないでくれ。

ここに処女の私の娘と、あの人の側女がいる。今、二人を連れ出すから、彼らを辱めて、あなたがたの好きなようにしなさい。しかしあの人には、そのような恥ずべきことをしないでくれ。」

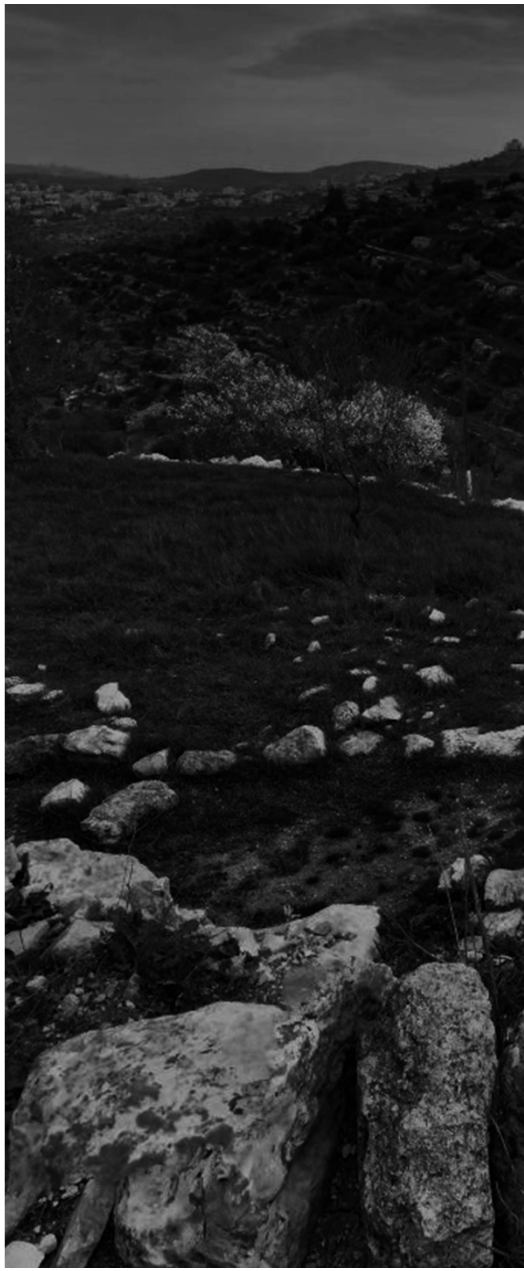
【残虐な民、冷酷な主人】士師19:25~28

しかし、男たちは彼に聞こうとしなかった。そこで、その旅人は自分の側女をつかんで、外にいる彼らのところへ出した。彼らは彼女を犯して、夜通し朝まで暴行を加え、夜が明けるころに彼女を放した。

夜明け前に、その女は自分の主人がいるその人の家の戸口に来て、明るくなるまで倒れていた。

彼女の主人は、朝起きて家の戸を開け、出発しようとして外に出た。見ると、そこに自分の側女である女が、手を敷居にかけて家の入り口で倒れていた。

彼は女に「立ちなさい。さあ行こう」と言ったが、何の返事もなかった。そこで、その人は彼女をろばに乗せ、立って自分のところへ向かって行った。



【イスラエルの衝撃】士師19:29～30

彼は自分の家に着くと、刀を取り、自分の側女をつかんで、その肢体を十二の部分に切り分け、イスラエルの全土に送った。

それを見た者はみな、「イスラエルの子らがエジプトの地から上って来た日から今日まで、このようなことは起こったこともなければ、見たこともない。このことをよく考え、相談し、意見を述べよ」と言った。

■神に滅ぼされたソドムにも匹敵する罪が、イスラエルで起こされた。

Ⅱ．ベニヤミンとの戦い　士師記20章

【結集したイスラエル】 士師20:1 ～11

- ベニヤミンを除くイスラエル11部族が、幕屋のあるミツパ(シロ)に集結した。兵士だけで40万。
- レビ人は、自らの罪と不信仰には一切触れず、ギブアの罪を激しく糾弾した。

20:8 そこで、民はみな一斉に立ち上がって言った。
「私たちは、だれも自分の天幕に帰らない。
だれも自分の家に戻らない。」

- イスラエルは、くじを引いて神託し、十人に一人が報復隊に選出された。

20:11 こうして、イスラエルの人々はみな団結し、
一斉にその町に集まった。

【初日の戦い】 士師20:12～21

- イスラエルは使者を送り、ギブアの住民の引き渡しを要求したが、ベニヤミンはこれを拒絶した。
- その日、2万5千のベニヤミンの兵士がギブアに集結。ギブアの精鋭七百人は、左利きで石投げの名手だった。
  ➡後の士師、ベニヤミン族のエフデは左利き！

- 対するイスラエル軍は40万。主はユダに先陣を命じた。
  ➡率いたのは最初の士師オテニエルか？

20:21 ベニヤミン族はギブアから出て来て、その日、イスラエルのうち二万二千人を滅ぼした。
➡最初の戦いは、ベニヤミン族の圧勝だった。

【二日目の戦い】士師20:22～25

しかし、イスラエルの人々の軍勢は奮い立って、最初の日に陣を敷いた場所で、再び戦いの備えをした。

イスラエルの子らは上って行って、【主】の前で夕方まで泣き、【主】に伺った。「再び、同胞ベニヤミン族に近づいて戦うべきでしょうか。」

【主】は言われた。「攻め上れ。」

そこで、イスラエルの子らは次の日、ベニヤミン族に向かって行ったが、ベニヤミンも次の日、ギブアから出て来て彼らを迎え撃ち、再びイスラエルの子らのうち一万八千人をその場で殺した。

■イスラエルの犠牲は二日で4万人。➡ **十分の一**

【イスラエルの悔い改め】士師20:26～29

イスラエルの子らはみな、こぞってベテルに上って行って泣き、そこで【主】の前に座り、その日は夕方まで断食をし、全焼のささげ物と交わりのいけにえを【主】の前に献げた。

イスラエルの子らは【主】に伺った――当時、神の契約の箱はそこにあり、また当時、アロンの子エルアザルの子ピネハスが、御前に仕えていた――イスラエルの子らは言った。「私はまた出て行って、私の同胞ベニヤミン族と戦うべきでしょうか。それとも、やめるべきでしょうか。」【主】は言われた。「攻め上れ。明日、わたしは彼らをあなたがたの手に渡す。」

そこで、イスラエルはギブアの周りに伏兵を置いた。

【三日目の戦い】士師20:30～33

三日目にイスラエルの子らは、ベニヤミン族のところに攻め上り、先のようにギブアに対して陣備えをした。

ベニヤミン族は、この兵たちを迎え撃つために出て、町からおびき出された。彼らは、一方はベテルに、もう一方はギブアに至る大路で、この前のようにこの兵たちを討ち始め、イスラエルのうちの約三十人が野で剣に倒れた。

ベニヤミン族は「彼らは最初の時と同じように、われわれの前に打ち負かされる」と考えた。しかし、イスラエルの子らは「さあ、逃げよう。そして彼らを町から大路におびき出そう」と言った。

イスラエルの人々はみな、持ち場から立ち上がって、バアル・タマルで陣備えをした。一方、イスラエルの伏兵たちは、自分たちの持ち場、マアレ・ゲバから躍り出た。

【罠にはまったベニヤミン】士師20:34~37

こうして、全イスラエルの精鋭一万人がギブアに向かって進んだ。戦いは激しかった。ベニヤミン族は、わざわいが自分たちに迫っているのに気づかなかった。

【主】がイスラエルの前でベニヤミンを打たれたので、イスラエルの子らは、その日、ベニヤミンの二万五千百人を殺した。これらの者はみな、剣を使う者であった。

ベニヤミン族は、自分たちが打ち負かされたのを見た。イスラエルの人々はベニヤミンに陣地を明け渡した。それは、ギブアに向けて備えていた伏兵を信頼したからであった。

伏兵は急いでギブアを襲った。伏兵はその勢いに乗って町中を剣の刃で討った。

【勝敗を決した瞬間】士師20:38～40

イスラエルの人々と伏兵の間には合図が決められていて、町からのろしが上がったら、イスラエルの人々が引き返して戦うことになっていた。ベニヤミンが攻撃を始めて、剣に倒れる者が約三十人、イスラエルの人々の中に出たとき、彼らは「きっと前の戦いの時と同じように、彼らはわれわれに打ち負かされるに違いない」と考えた。

のろしが**煙の柱**となって町から上り始めた。ベニヤミンがうしろを振り向くと、見よ、町全体が煙となって天に上っていた。

■現れた神の栄光は、神の裁きの確かなしるし。

【ベニヤミンの敗退】士師20:41~45

そこへイスラエルの人々が引き返して来たので、ベニヤミンの人々はわざわいが自分たちに迫っているのを見て、うろたえた。 彼らはイスラエルの人々の前から逃れて荒野の方へ向かったが、戦いは彼らに追い迫り、町々から出て来た者も合流して彼らを殺した。 イスラエルの人々はベニヤミンを包囲して追いつめ、メヌハから、東の方の、ギブアの向こう側まで踏みにじった。

こうして、ベニヤミンの一万八千人が倒れた。これらはみな、力ある者たちであった。

またほかの者は荒野の方に向かってリンモンの岩まで逃げたが、イスラエルの人々は、大路でそのうちの五千人を討ち取り、なお残りをギデオムまで追いかけて、二千人を打ち倒した。

【戦いの終わり】士師20:46～48

その日、ベニヤミンの中で倒れた者は剣を使う者たち合わせて二万五千人で、彼らはみな、力ある者たちであった。しかし、六百人の者は荒野の方に向かって**リンモンの岩**に逃げ、四か月の間、リンモンの岩にとどまった。

イスラエルの人々は、ベニヤミン族のところへ引き返し、無傷のままだった町も家畜も、見つかったものをすべて剣の刃で討ち、また見つかったすべての町に火を放った。

■**聖絶。**➡この戦いは主の裁きの戦いだった。

Ⅲ.　神への背きの末路　　士師記21章

【ベニヤミンの聖絶の後に】士師21:1～7

21:3 「イスラエルの神、【主】よ。なぜ、イスラエルにこのようなことが起こって、今日イスラエルから一つの部族が欠けるようになったのですか。」

- 600人のベニヤミンが生き残ったが、イスラエルは、ベニヤミンに妻を与えないと誓っていた。
  - ➡このままでは、12部族の血筋が絶えてしまう。
  - ➡神の永遠の約束が理解されていない。

- 誓いに固執する彼らは、別の誓いを思い出した。戦いに参加しない者は殺されなければならないと。

【ちぐはぐな信仰】 士師21:8～14

- ヨルダン川東岸のヤベシュ・ギルアデの民の不参加が判明し、1万人2千の兵が送られた。
- 町は全滅させられ、400人の処女が連行され、生き残りのベニヤミンの男達に妻としてあてがわれた。
- それでも、200人足りなかった

21:17「ベニヤミンの逃れた者たちに、跡継ぎがいなければならない。イスラエルから部族の一つが消し去られてはならない。しかし、自分たちの娘を彼らに妻として与えることはできない。イスラエルの子らは『ベニヤミンに妻を与える者はのろわれる』と誓っているからだ。」

※一見、信仰的？　優先されているのは自分の思い。

【驚愕の提案】士師21:19～22

そこで、彼らは言った。「そうだ。毎年、シロで**【主】の祭り**がある。」――この町はベテルの北にあって、ベテルからシェケムに上る大路の日の昇る方、レボナの南にある――

彼らはベニヤミン族に命じた。「行って、ぶどう畑で待ち伏せして、見ていなさい。もしシロの娘たちが輪になって踊りに出て来たら、あなたがたはぶどう畑から出て、シロの娘たちの中から、それぞれ自分のために妻を捕らえ、ベニヤミンの地に行きなさい。

※律法で定められた**主の祭り**を礼拝する娘たちが、
　ベニヤミンの男達の略奪の対象に！

完全に見失われた主の祭りの意味

【士師記の結論】 士師21:23～25

■ベニヤミンの男達は、提案通りに実行すると、相続地に帰り、町を再建して、そこに住んだ。

■以下が、士師記のテーマであり、結論。

21:24 イスラエルの子らは、そのとき、そこからそれぞれ自分の部族と氏族のもとに戻り、そこからそれぞれ自分の相続地に出て行った。

21:25 **そのころ、イスラエルには王がなく、それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた。**

Ⅳ. まとめと適用　打ち砕かれて主の愛を知ろう

ベニヤミン側から見たエルサレム

【ベニヤミンの聖絶を招いたイスラエルの異常】

- 側女を持つ、寄留のレビ人。軽視される安息日。忘れられた使命。
  レビ人にとっても、余りにも軽い側女の命。

- 欲望に支配された、暴虐の町ギブア。
  ギブアでは、主に仕える**レビ人**を犯そうとした。
  ソドムでは、警告に訪れた**御使い**を犯そうとした。(創19章)

- 大洪水の裁きでは、**堕天使(悪霊)**が人の女と交わった。(創6:4)

越えてはならない一線を、越えてしまったギブアの罪

【ベニヤミンの聖絶から得る教訓はあるか？】

■イスラエルの戦後処理も、疑問だらけ。
一見、信仰深いようで、優先されているのは、自分たちの思い。

■何もかもが異常な世界で、人間の良心は麻痺していく。
何が正しくて、何が間違いなのかも、まるで分からない。
　激しく揺さぶられて、方向感覚を失った時のように…。

■王なき時代の混沌は、まさに、今この時代にも重なること。
人権が声高に訴えられる一方で、平然と消されていく無数の命。
欲望が野放しの世界で、犠牲にされるのは常に、弱い立場の人々。

■イスラエル同様、主の教えから離れれば、瞬く間に飲み込まれる。

【ベニヤミンの聖絶から得る教訓はあるか？】

- 士師記は、律法の時代のただ中に記された警告の書。
  主の教えを離れれば、いかに人間はたやすく堕落するのかと。

- 人間の本質は、今も何も変わらない。
  私たちの立つべき、主のみ教えを確認しよう。
  ➡ **キリストの愛の律法**に堅く立とう。

- 旧約同様、新約聖書で最も多い戒めは、偽りの教えへの警告。
  堅く守るべきものと柔軟に適用すべきものの区別はできているか？

- 正しい判断力は、日々の学びと適用からしか身につかない！

【裁きの背後におられる主にこそ意識を向けよう

■ あまりにも凄惨な出来事の前に、思考停止に陥る私たちがいる。
目を向けるべきは、全知全能の万物の支配者なる主の存在。

■ ベニヤミンの聖絶は、厳粛な主の裁きだった。
義なる神は、決して悪を見逃さず、厳正な裁きをくだされる。
誰一人、主の裁きを逃れうる者はいない。

■ 己の罪、人類の罪の現実に向き合わされるなら、
神の怒りの杯を、逃れうる道などないと思い知らされる。

■ 自分自身の罪に絶望するなら、それが救いへの道となる。

【救いと裁きの主イエスに信頼しよう】

マルコ 14:62 そこでイエスは言われた。
「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになります。」
➡十字架直前、ユダヤ議会でのイエスの宣告。

■**救い主**イエスは、私たちの罪のために十字架にかけられ、父なる神と断絶され、死を打ち破って復活され、天に昇られた。

■私たちの祈りを父にとりなしてくださっている大祭司イエスは、すべての人の悪を裁く、厳正な**裁き主**として帰ってこられる。

■神の**義**なくして**愛**はない。**愛の神**は、悪を放置してはおかれない。

【受難節にあって、自分の現実に向き合おう】

■ 士師記は、これを読むイスラエルに己の罪の深さを突きつけた。

■ 私たちもまた、自らの罪の現実を直視するよう求められている。
まともに、自分を直視するなら、絶望するしか道はない。

■ そこからのみ開かれる、救いと恵みの道がある。
一方的な主の約束が、主を信頼した者を、打ち砕き、癒やし、
そして、御手をもって、高みに引き上げてくださるから。

■ 安心して、自分に絶望しよう。喜んで、義なる主をたたえよう。
打ち砕かれ悔い改めた魂を、主は慈しみ、憐れみ愛してくださる。
まことの平安の内に、次の一歩を歩み出して行こう。

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、
①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、
②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、
③三日目に復活(ふっかつ)したこと、を信じます。
イスラエルの罪は、わたし自身の罪だと教えられました。
み教えをはなれれば、たやすく落(お)ちこむ人の弱さを思います。
どうか　この身(み)をうち砕(くだ)き、
まことの悔(く)い改(あらた)めに　みちびいてください。
あなたの愛(あい)と憐(あわ)れみを、真実(しんじつ)に味(あじ)わう
よろこびで　みたしてください。
主イエス・キリストのみ名によって祈ります。　アーメン」